
きみのかおりと、

みまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのかおりと、

【著者名】

Z5591F

【作者名】

みまん

【あらすじ】

僕と彼女のちょっとぴり甘めな日常です。『きみのかおり』を読んで、拒否反応が出なかつたかたは是非ビックリ。不定期更新。

ふるわーぐ。（前書き）

前作『きみのかおり』の僕と彼女のお話です。でも読まなくとも大丈夫だと思いますよ。

♪恋の歌一曲♪

突然だが僕は、

「うあ……っ」

普通の、

「……ひいや……っーー?」

そんじゅれいりん、

「こや…っーー!」

「うわーうわーうわーうわー!」

「ほんと…っーー!」

少年である。

「やめなさあーつーーーー?」

まべのあせり。

「なんで?」

「やつ、と笑つた彼女はやつと僕のふくらはぎから指を離した。

「なんでじゃ……あ……、ありません……」

はあはあ、と肩で息してる、じつちが僕。
ちなみにここには彼女の部屋の2段ベッドの上の階。
彼女の寝床だ。

「……あんなに嬉しそうだったのに……」

彼女は相変わらず一いや一いやしている。いやータータ、かな?

「誰も……、嬉しそうになんか……」

しない。

といいかげたのに息のあがつていてる僕の肺は言つことを見かなくて、

「いほつ……?」

派手にムセた。

「大丈夫!？」

すぐに心配してくれる彼女。

僕は「へへへ」へ頷きながらむせこんでいた。

彼女がとんとんとん、と僕の背中を叩く。
なんだか安心した気分になつて、肺のほつも落ち着いてきたみたいだ。

「…ありがと」

うつむいていた顔をあげ、彼女に礼を言つ。
彼女はうつむいてふう、とため息をついた。

「心配…した？」

彼女に聞いてみる。

彼女は1回頷いたが、うつむいたままだつた。

そつままでのテンションはどこにいったのだろ？。

しょんぼりとした彼女は、いつもより小さく見えた。

「…よしよし」

彼女の頭に手をのせる。

そのあと彼女の髪をわしゃわしゃとせつた。

広がる、彼女の香り。

いい匂いだな、なんて和んでいたら、彼女にのせていた手をおろされてしまった。

僕の右手は彼女のひざへ。

彼女は僕の右手首をつかんだまま、僕によたれかかってきた。

ばすつ、と音がして、彼女が僕の胸におさまる。

ふわり、と僕を彼女の香りがつつんだ。

彼女の左手が僕の右手首を離れて、僕の腰に回った。右手はそろそろ僕の背中をいじっている。

その右手が動ぐのを止め、ぎゅつ、と抱きしめられる。

「……」めんね……

彼女が呟いた。

「なにが？」

彼女の頭が僕の肩になる。しつかりと、彼女の重みがした。

「あんなこと……しなければ……

あんなこと。

冒頭の僕の全身をいじり倒したあれのことだろうか。

彼女は天性のサディストらしく、僕の弱いところ、ふくらはぎ、せきなど、ふとももの裏、脇腹などをくすぐったときで僕のHロボイズム

(彼女談)が大好物らしいのだ。

正直僕もあれには困っているのだ。でも、

「……」めん、なさい……」

そんな弱々しい声で謝られたら、許すしかないじゃないか……？

「……許して、くれないよね……」

「いや！？そのつ……」

「ん　？」

彼女が肩の上で首を傾げる。

彼女の髪が首に触れてびくつ、とてしまつ自分が悲しい……。

「別に……いいよ……？」

びくびくしたまま彼女に言ひ。

彼女はもう一度、僕をぎゅっと抱きしめて、

「つあ……！？」

僕の首をひと舐めした。

「ふつふつふ。騙されたねマゾヒストくん

僕の体を離れたサディストは僕の前で高らかに笑った。

「…僕は別にマジじゃない」

「言葉のアヤだよ」

彼女は愉快そうに笑うが、僕はせんぜん愉快じゃない。

「ああ、ここに寝転がって？」

彼女は僕の右側に移動してきて、わあわーと僕を促している。

騙されたね。

と言っているところを見ると、先ほど弱々しいのは演技だったのだろうか。

まあ、よくある」とひひあよへあることなのであまり気にしないでおこう。

そこも僕が好きなところだ。

枕やら布団やらを脇によせていつ伏せになった。

「ん。いいんだねえ」

満足そうに彼女は僕の頭を撫でた。

「で、何？」

「何って」

そういふと彼女は僕のふくらまを露出すやつ

「つーづーき」

人差し指でつつつ、となぞつた。

「ひや……つー？」

びくん、と体が跳ねる。

背筋をぞくぞくと何かがのぼってきて、僕の視界を真っ白にした。

「ちょっと待つてー？」

「なんで？」

足首からのぼってきた人差し指は、またつつつ、と足首の方へ戻つていいく。

僕はそれをぐつと堪えた。

タイムタイム、と両手で丁の字を作る。

「なんで続きー!? 前にもダメって言つたでしょーー!？」

「だつていいよつていったもん」

「ふー、と彼女は頬を膨らませている。

ちなみに僕は腰から右側に曲がつて彼女を見ている。

結構ムリな姿勢だ。

「…じつ?」

「 もう 他」

… もう 他……。

そんな」と、許可しただろ? うか。

「 別にこよ、 つて」

別にこよ…。

…… もう 許したとおに 重ね葉だー。

「 違うー! あれは…」

「 『あんなことしなければよかつたね。』『めんね』に『別にこよ
つて答えたんだから、別にやつてもいんじょ?』

にたあー、 と笑う彼女。

「 もう こつ風にもとれるかもだけどー。」

焦る僕。

「 もう こつ風にとつたからー。」

「 んむー。」

口をふさがれて、 曲げていた腰をもとの位置に戻される。

「 つくー」

「むーーん…つ…?」

わざとらしく笑う彼女。

今度はふとももの裏側。

体は跳ねてふとももを彼女のいない側 つまり左側 に隠した。口をふさいでいた手もいまの弾みでとれた。

僕は彼女のほうをむいて、横向きに寝ている。

すると彼女の手が僕のお腹にのびてきた。

やばい、と思つた瞬間だった。

「えいっ」

彼女は僕のお腹を露出させてにんまりとした。

奥の方にある左手の人差し指がなんだか卑猥にみえますよ、お嬢さん…。

「ダメー! お腹はホント弱いから! -!」

必死に両手で隠したが、

彼女の両手にがっちりとつかまれ、ベッドに押さえつけられた。

仰向けになつた僕のふともものあたりに彼女が陣取つてゐる。

両手が自由にならなければくすぐられないと思い、自分の両手に逃げられないギリギリの力をかけた。

「れでじほりくたてば諦めるだろつと、彼女をみた。

相変わらぬ「ヤーヤー」してこう。

何故だろ?と思つていたら、彼女のあいが僕のお腹にのつた。

あいじやなすがこくすぐつたくなこぞ、と呟つてやうつとしたら、

「べ
」

彼女は舌をだして笑つていた。

まさか。

舐めるつもじゅ。

「あつと氣持ひけイイよ。」

彼女はえへつ、といったかんじで笑つて僕の顔から皿を取つした。

「……。いやつ……ダメ……。」

僕の視界はぶつ飛んだ。

「いやあああああつ……?」

正直、あのあとどうやって家に帰ってきたのか、まったく記憶にな
い。

あの日の彼女は、
血に飢えた野獸だった。

まべのあせつ。（後書き）

とこつわけで、第1話でした。ちょっとコメテイー色が強くなりすぎてしまつたので、次回からは気をつけていきたいですね。それでは、読んでくださつてありがとうございました。

ねじれ。

彼女のおでこに自分のおでこを軽くぶつけた。

これが僕なりの愛情表現だ。

そのあと彼女を抱きしめて、彼女の頬に自分の頬をつけた。ひんやりとした彼女の頬は、かなり気持ちがいい。

そして僕の鼻をくすぐるのは、僕の大好きな彼女の匂い。

鼻で大きく息を吸う。

いかん、過呼吸になりそうだ……。

「どうしたの？」

彼女の頬が動く。

僕は彼女の耳に息を吹きかけるように言つ。

「好きだ」

彼女の体がぴくんと跳ねて、甘い声が漏れる。

珍しい。
彼女はこういう刺激には強い人なの……。

僕は肺がいっぱいになるように彼女の香りを吸つて、ゆるゆると彼女の耳に吹きかけた。

「……やつ……」

可愛い。

僕は彼女の肩に両手を置くと、頬に軽くキスをしてそのまま後ろに寝転がった。

今日は彼女のベッドではなくて彼女の部屋の『わごわのじゅうたん』の床なので、寝心地はあまり良いとはいえない。

ちなみに、僕は今の一連の作業をするだけでかなり精一杯である。

力加減が難しいのだ。

ドキドキや戸惑いに敗けっぱなしだとキスもできないし、だからといつて、本能の手綱を手放してしまえば何をしかすかわからない。

僕はそんなヤツだ。

「…ねえ？」

いつの間にか僕の隣に寝転がっていた彼女に言つ。

「好きだよ」

彼女はこれもまた珍しく、照れるような身振りをして僕に顔を押し付けた。

「……つるさー

彼女がぼそっと言ったので、僕は
「いめんね」と謝って彼女の頭を撫でた。

「… ゆるわ」

「あらがと」

彼女の頭を優しく一回叩いて手を離した。

今日の彼女は可愛い。

… まあ、いつも思っていることなのだが。

僕は自分に呆れて口の端で少し笑った。自分が少し気持ち悪かった。

いつもなら僕の体のいたるところをつづいてくる彼女もおとなしいし、今日はわりと平和な感じだ。

目を閉じた。

僕の心臓の音と時計の秒針の刻まれる音、そして彼女の寝息。

「… 寝るの早すぎませんかねえ？」

僕の呟きが聞こえるわけもなく、彼女の幸せそうな寝息はリズムを崩さない。

ちょっとむかついたので、

「えいっ」

彼女の頬をつついてみた。

「…むー…？」

彼女は顔をしかめて、少し下を向いた。

僕はどうすればいいのだろうか。

起き上がつてみようとしたが、彼女に腕をつかまれていた。

突然だが、彼女には特殊能力がある。

彼女の隣に座つていると、ものすごく眠くなるのだ。

彼女が眠つていたり、自分が寝転がつたりすると完璧にその能力の餌食だ。

彼女の前で眠るのはとても危険なことのように感じられる。僕の眠りは結局深いので、彼女のくすぐりではおそらく起きないだろう。

でも体は反応するだろうから、僕の「エロボイス」が大好物の彼女には絶好のエロボイス日和になるだろひ。

…かなりぞつとする…。

と、いうわけで。

「起きてくれー…」

僕は彼女をゆさゆさしてみることにした。

ちなみに、腕から無理やり離したぐらいでは、彼女は起きなかつた。

「…んー…?」

彼女の手がぴくんと動いた。

意外と寝起きは悪くないようだ。

瞳がゆっくりと開く。

僕は彼女の顔の両横に手をついて、上半身だけ覆い被せるようにして彼女の様子を見ていた。

瞳が完全に開いた。

僕の方を不思議そうに見た後に、頭を少し動かして頭上の時計を見て、また僕の方を見た。

両手が動きだした。

彼女は目をこするとその両手を目の前に伸ばし始めた。目の前つてのは僕の方つてこと。

「どうした?」と口を開こうとしたら、彼女の両手が僕の両頬に触れた。

眠たそうな瞳が再び閉じられる。

ぐいと僕の頭は彼女の胸に引き寄せられた。

「んっ！？」

僕はとつて口を開じた。

彼女は僕のおでこにキスをして、僕の頭を解放してくれた。

「お…、おきた？」

僕がびくびくした声で聞くと、彼女は眠そうにうへへへと頷いた。

僕はふうと息をついて起き上がった。

彼女は僕の服を引っ張つて起き上がってきた。

「ねーねー」

彼女が僕を呼ぶ。

僕が彼女の方を向くと、

「つむつむ！」

そのままキスされた。
今度はしつかり唇に。

前言撤回。

寝起きは最悪だ。

驚いた僕が抵抗すると、彼女はすぐに僕を解放してくれた。

「おはよ

彼女はこつものにせつとした笑顔を浮かべて言つた。
僕は額に手をあてて息をついた。

「おはようございます、キス泥棒の白雪姫

「生憎りんごは食べてないなあ

「じゃあ、眠り姫ですかねえ

くすりと彼女が笑つた。

「ずいぶんとキスの苦手な王子さまです」と

僕は彼女に「ハッピングをくらわせた。

彼女は小さく声をあげたけど、懲りずに僕に言つ。

「大好きだよ、王子さま。キスがへタでもね

「ぬつせー

にらみつけたけど、彼女があんまり可愛らしく笑つたので、少しひるんでしまった。

しょうがない。

今回だけは許してやるか。
珍しいものも見られたし。

「……好きだよ…同じぐらい……」

……今回だけだからな!!

しへじへざ。 (前書き)

あけました。おめでとうござります。今年もよろしくお願ひ致しますねー。なんだかマニアカル通りつて感じで申し訳ないですが、お話をほり、楽しんでいただけたら光栄です。

時間は刻々と過ぎていく。

「ソーラの時計、進むの速いんじやない？」

僕の真剣な疑問に彼女は、まつさかあ、と答えた。

ベッドの上で彼女の目覚まし時計とじめつにしてみたが、秒針のスピードと僕の心臓のスピードは同じぐらいだったからため息をついた。

「ですよね……」

僕は諦めて目覚まし時計を元の場所に戻して、彼女の枕を持ってベッドをおひた。

「でもれ」

おりてきた僕を右手でちょいちょいと呼んで、彼女がいった。

僕は枕をぎゅっと抱いて彼女の前に座る。

「楽しい時間つて早く過ぎるよな」

僕は相槌を打つて枕に鼻をうずめた。

彼女はやけにソーラー口にしてくる。

だから僕は彼女に好きだよ、と言つてみた。

彼女は知つてゐるし、と笑つて僕の頬をふにふにした。

「相対性理論…みたいな？」

彼女は掛けでもないメガネを上げる仕草をしながらインテリ、ぶつて言つた。

それ、AINシュタインが言つた有名な喻えで、実際はそれと相対性理論は違つんじょ？

言おうかと思つたけど、彼女の機嫌を損ねるのはいやだったのやめた。

かわりに、彼女の頭をなでなでした。

彼女は猫みたに目を細めて、今にもいいくつと喉を鳴らし出しあうだつた。

口では言つてたけど。

なでなでしながら枕の匂いを肺いっぱいに吸い込んだ。

少し粉っぽいような不快な埃の臭いをかきけすように彼女の匂いは僕のなかを埋めぬくす。

口で大きく息をはいて幸せつてこいつことだよな、と言つたらびっくり言つていた彼女に笑われた。

「やつすい幸せだね」

「そんなことない。なにものにも代えがたい極上の幸せだよ」

「彼女をじっと睨み付けて言つたらそーなんだ…、と苦笑い。ヤバい、引かせたかな…？」

まあ、いいか。

いつもは僕が引かされてるし。おあいこでしょ。

と、よくわからない理屈で自分を納得させて僕はピアノの前に座つた。

彼女の部屋にはピアノがある。

正確には、彼女と彼女の弟の部屋にはアップライトピアノがある、だが。

僕はピアノのふたを開いて鍵盤の上に乗つていいなんともいえない赤紫の長いフェルトを四つ折りにして椅子の上にいた。椅子は少し高いけれど、いじるのもめんどうせこし低いよりはましだからこのままでいいだろう。

白い鍵盤に人差し指を落とす。

ド、の音。

澄みきつたその音は穢れた僕らを責めるよつこもきこえた。

僕だけだと、いいけど。

鍵盤から一寸手を離してピアノの一番右のペダルをガタガタと踏んだ。

ちゃんと沈むのを確認して鍵盤に少し爪ののびた指をおく。

ペダルを踏み込んで鍵盤を優しく弾いた。

ドドドンの音。

弱々しくアタックをしたのコードは、ペダルの力を借りて部屋中にふあんと広がって意外とすぐには消えなくなった。

「へたくそ」

隣に立っていた彼女はくすりと笑った。

どうみても切りすぎの爪の指が鍵盤に落ちた。

僕は何か弾いてくれるのかと少しづくわくしたが彼女は2、3個長調の和音を弾いて僕のほうにむきなさい。

彼女を見上げると白慢気な笑顔をこちらにむけていた。

「…なん

「なんにも

彼女が僕の頭を乱暴に撫でて僕の脳みそを揺らした。

「くらうくらするし…」

僕は眩いでイスからおりてピアノを片付けた。
彼女にはまたの機会に弾いてもらおう。

「ねえ

彼女は返事をする。

僕は彼女の返事を聞いてから彼女に抱きついた。

「…ん。 どうしたの？」

彼女が訊いてきたけど僕は軽く首を左右に振つただけだった。

ふわふわと僕を包みこんでくれる気がして僕は目を閉じた。

彼女の胸に顔をうずめた。

ぽんぽん、と彼女の手が僕の背中をさすつた。

「…よしよし

僕は彼女を少しだけ強く抱き締めた。

かちや、ビデアノブの回る音がした。

「…？」

瞬間、僕は彼女から突き飛ばされ、わざわざのじゅうたんの床に転がった。

先ほどまで夢見心地だった頭では今の状況をつまく飲み込めなかつた。

とりあえず床から起き上がつた。

「あ…」

ドアを開けたのは彼女の弟だった。

氣まずそうにこちらを見ている気がする。

僕の被害妄想だらうか。

「…」んにちは

「久しぶり」

彼女の弟は僕と挨拶を交わすとじゃあ、といつてドアを閉めた。リビングにでもいったのだろうか。

「つはあ…。びっくりしたあ…」

「それはこいつの台詞です

冷静なまゝに繕っていたが僕の心臓は周りに音が聞こえるんじや、
とこうべりこぼくべりしていたのだ。

「じゃ、帰るわ。シンくんにも悪いし…」

なにを考えてるのかわからない彼女にいつ。

彼女は僕が自発的に帰ると言つたときはだいたい止めないのだ。

「あ、そんじゃ玄関まで」

僕たちは部屋を出た。

スニーカーをしつかりと履いて自転車の鍵をポツケからだして彼女
にバイバイを言った。

「うんじゃねー

玄関のドアに手をかけてもう一度振り返った。

なぜか偶然あつた『彼』の田はやっぱり僕らのことを、なんだかぎ
こちなく見ているよつて思えてしうがなかつた。

氣のせいだと、
いいな。

ばれんたいん。（前書き）

しばらくぶりです。遅くなりましたがバレンタイン話です。
脱字等あつましたらお伝えください。では、じゅつくり。

誤字・

ばれんたいん。

「バレンタインデー……か……。」

ふう。

僕はため息をついた。

正確にはバレンタインデーだった、だが……。
彼女はどこに行ってしまったのだろうか。

彼女のことだから、そんなことすっかり忘れて、ゲームしたり真面目に勉強したりしているのかもしれない。

……別に欲しかった訳じゃない。

……断じて。

確かに甘いものとか大好きだし、チョコレートなんて本当にこの上ないぐらい好きな部類にはいるし、いつも部屋にはチョコ置いてあるし、貰えたら少しくらいは嬉しいかなあ～なんて思うけど――！

……言つてて虚しくなってきたよ……。

はああ。

深めにため息をつく。

気分転換に近所のスーパーにでもこいつ。

スーパーがいい。

コンビニはちょっと高めなバレンタインにあげる用のチョコが置いてあって僕に買って欲しそうにじっと見つめてくるに違いないからだ。

近所のスーパーで、白いダースとチョコチップクッキーとそれからミルクティーを買おう。

それを食べながら、独り寂しくテレビのバラエティーでも見ようぢやないか。

可でもなく不可でもないようなトレーナーのつえに、よくわからぬにもこもこしたジャンパーを羽織る。

僕は彼女と違つて、ファッショントかにあまりこだわりがないから、詳しい名称とかは解らない。

まあ、わからなさすぎだけじや。ジャンパーのポッケに財布を突っ込んで自転車のカギをひつかむ。

おひび。

テレビとストーブも消して……。

戸締まりを確認… つと。

僕は自転車に跨がつて家を出た。

がしゃん。

自転車の鍵をかけて、カゴからスーパーの袋を取り出した。

バレンタインデーが過ぎたせいなのか、白いダースはいつもよりかなり安い値で売られていて、予定よりも多く買つて来てしまった。

すこし重めのそれをぶらぶらさせながらポストを覗く。

無理矢理曲げて入れられているダイレクトメールを引っ張り出してポストを閉じようとした。

あれ。

ダイレクトメールが居なくなつてすこし広くなつたポスト内には、電気料金の明細書とすこし膨らんだ紙袋が。

僕はそれらを引ったくるよひにして、出ていくときに鍵をしめられた玄関のドアを開けた。

どたばたトリビングに入り、自分を落ち着けるためにもと、ストーブとテレビを付けた。

ふつ。

一つ息をはいた。

ダイレクトメールをダイニングテーブルに半ば叩きつけるよひにして置いて、電源の入っていない炬燵に入る。

白いダースたちは炬燵の上で待機だ。

茶色いどこにでもありそうな紙袋はすこしだけチョコの匂いを漂わせていて、僕はにやついた笑顔になる。

中を覗いてみた。

チョコケーキと白い画用紙。

チョコケーキは見て分かるぐらこじつとつとした出来栄えで紙袋のマチぎりぎりの横幅だ。

きっと僕がこいつのを好きだとわかっているんだろう。

これだけあれば満足できそうだ。

そして、白い画用紙。

手のひらよりすこしき大きめのそれは一ツ折りにしてあつて上面には

青い水性のボールペンでなにか書いてある。

…英語の筆記体。

おやりく『ハッピーバレンタイン』。

見慣れた彼女の優しい文字。

この青い水性ボールペンは最近の彼女のお気に入りで「これある」と使っているものだ。

中を開くとシンプルだが可愛らしくシックなハートや黒ネコのシールがセンスよく貼られていて、彼女らしいなあなんて笑ってしまった。

シールと文字は下半分にのみ。

『遅くなつて』めんなさい

チョコケーキです

うまくできたから感謝してたべるんだぞ

なんてね（笑）

ホントはちゃんと昨日にきてたんだよー

ただにーさまとーさまが食べちゃつて…（・・・）

でも2回目だから味はバツチリ！

…のハズ…（苦笑）

ホワイトティーは3倍返しだよー！

楽しみにしてるから』

』

なんか…泣きそだわ……。

持つていくのを忘れていた携帯には僕が家に居ないこと責める彼女からのメールが入っていて。

『ごめん。

ありがとう。

愛してる。』

送信ボタンを押して、ケーキにかぶりついた。

恥ずかしいから、彼女からの返事の内容はあまり考えたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5591f/>

きみのかおりと、

2010年10月12日08時16分発行